

看護専門学校教員の生涯学習に関する文献検討

山本裕子、滝下幸栄、岩脇陽子

京都府立医科大学医学部看護学科

Review of Literature on the Lifelong Learning of Nursing Teachers

Hiroko Yamamoto, Yukie Takishita, Yoko Iwawaki

School of Nursing for Kyoto Prefectural University of Medicine

要約

看護専門学校教員の生涯学習行動の内容を明らかにし、継続教育の課題を見出すことを目的に、10 文献の検討を行った。その結果、研究内容は、生涯学習行動に関連する要因を明らかにする実態調査が多かった。看護専門学校教員は、授業や事務に追われ多忙を極めるあまり時間的・精神的ゆとりを失っている実態が報告されていた。看護専門学校教員の学習を促進する要因は、「専任教員講習会や大学・大学院進学」、「支援的な先輩教員の存在」、「研究活動」、「仕事満足」、「職場役割の変化」であるとされていた。そして、学生指導や教授方法、看護実践力の向上に向けての学習ニーズを持ち、学外研修や大学院、看護専門学校教員同士の学習など活発な自己教育を中心とした生涯学習行動を行っていた。その中でも、新任教員は教育実践力の未熟さや学生、実習施設へのコミュニケーションが上手く図れないことから、先輩教員の助言を必要とし、自分の時間やお金を使って研修や大学進学にむけて自己学習している様子が伺えた。しかし、個人で行う学習活動は、独善的になりやすく、自己教育力の育成には貢献していないことも報告されていた。また、9 文献において看護専門学校教員への継続教育システムの整備が必要であると言及していた。

以上から、看護専門学校教員の生涯学習行動は、自己教育を中心とした方法であり、看護専門学校教員を取り巻く人々との関係作りが、看護専門学校教員の生涯学習行動に好影響を与えている様子が伺えた。また、講習会や大学院進学など体系的な継続教育を受けるなどの自己研鑽に努めていた。一方で、業務量の多さによる時間不足や人員不足など、労働環境に対する困難を抱えているとされていた。そして新任教員は、日頃の教授活動における迷いや困難を具体的に解決する方法を見出せず、支援を求めている内容が多くみられた。今後は、看護専門学校教員の経験年数別に対応した、継続教育システムの整備への課題が明らかとなった。

キーワード：看護専門学校教員、生涯学習、自己教育力、継続教育

I. はじめに

看護基礎教育は社会や時代の要請の変化と基礎教育の大学化により、看護専門学校教員に対しても多くの知識や知見が求められるようになった。看護専門学校には、大学のように FD（ファカルティ・ディベロップメント）の取り組みは義務付けられておらず、継続教育が困難であると従来から言われている¹⁾。

このような背景のもと、2010 年に「今後の看護教員のあり方に関する検討会報告書²⁾」がとりまとめられた。そこでは、看護基礎教育の充実のためには看護専門学校教員の質の向上が不可欠であることが明記されている。また看護専門学校教員の個々の努力のみでは十分に教育実践力を習得できない面も指摘されており、継続教育の一層の充実が求められている。看護基礎教育を取り巻く教員の能力向上の取り組みや継続教

育、自己研鑽のあり方が問題視されている現状がある。

看護専門学校教員は、看護基礎教育の向上に向けて継続的に研鑽し、生涯を通じて学び、能力の維持や向上に努めなければならない。また看護専門学校教員の経験年数や個人の能力を踏まえた生涯学習支援のあり方を検討する必要があると考える。

そこで、本研究では、看護専門学校教員の生涯学習行動に焦点を当て、その内容を文献検討して、継続教育の課題を見出すことである。

II. 用語の定義

1. 生涯学習とは

生涯学習とは、1981 年に出された中央教育審議会答申では、「生涯にわたって、各自の自発的意志に基づき、必要に応じて、自己に適した手段・方法を自ら

の責任において自由に選択し、行うべき学習」とされている³⁾。

本研究における生涯学習とは、看護専門学校教員がその職業生活全般において教育実践力を高めるために行う自己学習行動とする。すなわち、自己教育も含めたすべての学習行動をいう。

2. 自己教育とは

本研究における自己教育とは、看護専門学校教員が主体的に学ぶ意思、態度であり、生涯学習行動の土台となる基礎的能力とする。また自己学習は、自己教育を学習者側から捉えたものとし、本研究では自己教育と同義と考え論を進める。

Ⅲ. 方法

1. 文献の選定

Web 版医学中央雑誌 Ver.5 を用いて、キーワードを「看護教員」、「看護職員」、「生涯学習」、「継続教育」、「自

己教育力」に設定して検索した結果、2000 年～2015 年までに投稿された論文、254 件が検出された（2016 年 11 月 25 日現在）。これらの要約を熟読し、臨床看護師や大学看護教員を対象としたものや会議録と解説を除き、本研究テーマである「看護専門学校教員、生涯学習」に関連した因子、生涯学習行動について述べている論文を絞り込み、10 文献を分析対象とした。

2. 分析方法

分析対象文献を、タイトル、研究目的、調査対象者、調査人数、調査方法の項目に分類し整理した。その後、本研究目的である、看護専門学校教員における生涯学習行動ならびに影響する要因と継続教育の支援策について、文献から内容を抽出し分類した。

Ⅳ. 結果

1. 分析対象文献の概要

表 1 に分析対象論文の発行年、タイトル、研究目的、

表 1 分析対象論文の概要

文献 番号	著 者 (発行年)	タイトル	研究目的	調査対象・人数	調査方法
1	原田美和子 ¹⁾ (2015)	看護教員の質向上に関する研究	看護教員のキャリア形成過程とその要因を振り返りの視点から明らかにすること	看護専門学校教員 5名	半構造化面接
2	草柳かほる ¹¹⁾ (2104)	看護専門学校に働く看護教員のキャリアに影響する要因 —外的・内的キャリアと就業継続意思との関連性—		看護専門学校教員 285名	質問紙調査
3	片岡和江ら ⁸⁾ (2013)	北海道内看護教員の継続教育における現状と課題(1) 調査結果から目標設定の検討へ	継続教育課題のシステム構築にあたっての困難の要因を明らかにすること	看護専門学校教員 375名	質問紙調査
4	久保真知子ら ⁹⁾ (2013)	北海道内看護教員の継続教育における現状と課題(2) 能力達成目標の設定と経年別研修内容の検討	看護教員継続教育システムの構築に向け能力達成目標の設定と経年別研修内容を検討すること	看護専門学校教員 375名	質問紙調査
5	野本百合子 ⁴⁾ (2012)	看護学校に勤務する教員の学習ニーズと教育ニーズの特徴 —中・四国地区の看護学校教員に焦点を当てて—	看護学校教員の学習ニーズ、教育ニーズを明らかにすること	看護学校教員 158名	質問紙調査
6	大場志乃 ¹²⁾ (2006)	新人看護教員の自己教育力の検討 —実習指導における自己評価と振り返りを分析して—	新人看護教員の自己教育力向上へのプロセスを検討すること	看護専門学校教員 4名	半構造化面接
7	豊田省子 ⁵⁾ (2004)	看護職者の生涯教育 —支援策を考える—	看護教員の生涯学習支援策を見出すこと	看護専門学校教員 136名	質問紙調査
8	豊田省子 ⁶⁾ (2004)	看護職者の生涯教育 —学習ニーズを考える—	看護教員の学習ニーズを明らかにすること	看護専門学校教員 136名	質問紙調査
9	豊田省子 ⁷⁾ (2002)	看護教員の自己教育力に関連する要因 —生涯学習の実態から—	看護教員の生涯学習の実態を明らかにすること	看護専門学校教員 136名	質問紙調査
10	玉井妙子ら ¹⁰⁾ (2002)	看護教員の教育実践能力に関する認識の実態	看護教員の教育実践能力に関する教員自身の認識の現状を明らかにすること	看護専門学校教員 75名	質問紙調査

調査対象・人数、調査方法の概要を示した。

研究目的は、学習行動や学習内容の実態を明らかにするものが4件^{4) 5) 6) 7)}で、継続教育プログラムの開発に関するものが2件^{8) 9)}、自己教育力に関するものが1件¹²⁾、看護専門学校教員の資質の向上に関するものが1件¹⁾、教育実践力に関する現状を明らかにするものが1件¹⁰⁾、キャリアに影響する要因を明らかにするものが1件¹¹⁾であった。調査方法は、質問紙による調査8件、半構造化面接2件であった。

2. 生涯学習行動の内容

各研究における看護専門学校教員の生涯学習行動の内容を表2に示した。

1) 生涯学習行動

看護専門学校教員が行っている自己の生涯学習内容を調査した研究は7件であった。生涯学習内容について、看護専門学校教員は、研修会や学会、大学院進学など個人の学習を進めている研究報告であった^{1) 5) 6) 7)}。また、新人看護教員は看護過程の教授のために、先輩教員の授業聴講により学習している報告がみられた¹²⁾。他には、自分の意識や行動を常に振り返ることが実践と理論を往復する思考を身に付けることであると報告した研究があった¹⁾。

2) 生涯学習を促進・阻害する要因

看護専門学校教員の生涯学習を促進する要因として、支持的先輩教員や組織外の優れた人物との出会いなど看護専門学校教員を取り巻く人々との関係作りであることを報告していたのは4件あった^{1) 7) 8) 12)}。また、看護実践能力の低下を感じたため、実践力を維持するための生涯学習行動を行うと報告しているものもあった¹¹⁾。職場満足度を高めること¹¹⁾や職場での役割変化⁷⁾が学びの契機になっているとしていた。そして学外での研究活動など自己の教育実践能力を高めることが、さらに学習意欲を促進していた⁷⁾。

看護専門学校教員の生涯学習行動を阻害する要因として、業務量が多く時間的、人的体制の困難さを明らかにしているものが4件あった^{1) 4) 7) 8)}。さらに研究費・研修費用の不足も生涯学習行動を阻害する要因とされていた⁷⁾。

3) 学習したい内容

看護専門学校教員の学習したい内容であるが、学生指導や教授方法に関するものが7件、臨床研修による看護実践能力の向上に関するものが1件あった。学習したい教授方法の内容は、授業評価、授業設計が多くあった。さらに、学生個々に合わせた生活指導や看護

過程の展開の指導について、看護専門学校教員の知識と経験不足を報告していた¹²⁾。他には、約6割の看護専門学校教員が看護実践能力の低下を感じていることや¹¹⁾、学校管理に関すること、研究能力^{1) 7) 4)}、理論的思考への学習ニーズ¹⁾が記述されていた。

新人教員への支援の必要性を記していたものは、4文献であった。授業展開や学生指導への支援を求めているもの^{1) 10) 12)}や、学生・教員・実習施設とのコミュニケーションに関するもの¹⁾、研究能力や理論的思考・看護過程の展開指導に関するものがみられた^{1) 8) 10) 12)}。

4) 継続教育の方向・支援策

継続教育や具体的な支援策についてであるが、教育プログラムを作成したものが1件のみであり、実施に向けては多くの課題があるとしていた⁹⁾。第1に研修をどこで実施するかについてである。第2は研修費用や研修日程、第3は他の関係団体との協力連携についてであった。継続的で系統化された組織的・体系的な教育システム構築の必要性を9文献で記述されていた^{1) 4) 5) 7) 8) 9) 10) 11) 12)}。

V. 考察

1. 看護専門学校教員の生涯学習行動の内容

看護教育に関する研究は、臨地実習や看護学生を対象にしたものが多く、看護専門学校教員に関する報告は少なかった。

看護専門学校教員の生涯学習方法は、日々の教育活動だけではなく、外部研修や大学院進学などの学習機会を積極的に設け、看護専門学校教員個々の努力によるものが多かった。そして継続教育への早急な取り組みを必要としていることが伺うことができた。

今回の分析では、看護専門学校教員の継続教育や支援策の有用性を明らかにした研究は見つからなかった。看護専門学校教員の継続教育については、2010年「今後の看護教員のあり方に関する検討会報告書²⁾」でその必要性を提言している。それを受けて、実践的な取り組みが展開されていると考える。

生涯学習行動の関連要因として、職場満足度を上げることが記述されていた¹¹⁾。つまり、職場満足度を維持するためには、職場の人間関係や労働環境を整えていくことが必要であると考ええる。特に新人教員は、情緒的支援や先輩教員の助言などのサポート者の存在¹²⁾、学生や実習施設とのコミュニケーションを円滑に行えること^{1) 12)}も生涯学習行動に影響を与えていた。学習意欲を保持する過程を明らかにした研究では、村瀬¹³⁾は、継続的に学習意欲を保持する過程を支える

看護専門学校教員の生涯学習に関する文献検討

表2 看護専門学校教員における生涯学習行動ならびに影響する要因と支援の方向

文献 番号	学習行動	学習を促進する要因	学習を阻害する要因	学習したい内容	継続教育の方向・支援策
1	大学や大学院進学、専任教員養成講習会、臨床に戻り看護実践能力を身につける、学会や研修会参加、振り返り新任教員は先輩からの助言をもらい自己学習している	専任教員講習会、大学・大学院進学、モデルとなる先輩の存在、研修に参加できる環境があること	新任教員は学生や教員、実習施設と上手くコミュニケーションが図れないこと	専任教員未受講の新任教員は学生指導、授業設計、理論的に考える思考過程について学びたい思いがあった。全教員が、研究に取り組みたい思いがあった	研修に参加したり研究に取り組める環境など、労働環境の整備が必要
2		仕事満足度を高めることや看護実践力を維持すること		約6割の教員が看護実践力の低下を感じ、看護実践力へのニーズがあった	仕事満足度を高めることや看護実践力を維持しながら教員として働き続ける具体的な支援策を今後検討
3		周囲のアドバイスをサポート体制、学内外のネットワークをもち、教育実践の交流や研修の場があること	教員の配置人数が少なく、日々の業務に追われて自分の学習のために時間を作り出すのは困難であること	教育実践能力の向上を目的とする指導・教授方法・授業評価、臨床研修で新任教員は、授業案の作成、学生理解を進める研修やカリキュラムに関すること	教員経験年数別に対応した継続教育の必要性、学校が組織として体制を整備し内容も系統化したシステムが必要
4					専任教員経年別能力達成目標の設定と研修内容の作成を立案したが、実施に関しては問題が多く課題(関係機関との連携、研修の企画・運営の具体化)がある
5			専門的な臨床実践能力を維持・向上するための機会や時間を確保できない	看護の視点を反映した解剖学・生理学・病理学、担当科目の専門性に関わる教授方法、講義・演習・実習で効果的に学生指導するための知識・技術・態度、研究成果を産出し社会に貢献する能力	継続教育プログラム立案への必要性(看護実践能力の維持・向上や専門性の探究に繋がるプログラムの開発)、研究時間を確保し、研究活動を円滑に進める内容を研修プログラムに取り入れる
6	新任教員は看護過程の授業の兆候を行い、自らで学習	新任教員は自己評価に加え第三者の面接により日頃の教授活動を振り返ることや学生、臨床指導者、先輩教員などの支援者やアドバイスをくれる存在がいることをあげていた		新任教員は看護学や教育方法の知識不足と看護師・教員としての経験不足、学生個々の合わせた看護過程の指導の学習を望んでいた。また実習環境の調整では臨床指導者や病棟スタッフとの関係性を修復できずに言葉かけや話し合いなどができるニーズがあった	新任教員への支援を今後検討
7	研修会や個人の学習、学会参加、講習会				学習環境の整備、成人教育の原理に根差した生涯学習支援が必要
8	研修会や個人の学習、学会参加、講習会			教養、カウンセリング能力、看護教育方法に関すること、教材研究や開発	情報のネットワーク化、学習相談サービスが必要
9	研修会や個人の学習、学会参加、講習会	6割の教員が学外での優れた人物との出会い、学外での研究活動など自己の教育実践能力を高めるためであった。また職場の役割の変化が学びの契機になっていた	事務的な業務量が多く、時間的・精神的ゆとりがないことや指導者不足。約5割の教員が研究費・研修費の不足を肯定していた	豊かな一般教養、カウンセリング能力、看護教育方法に関すること、教材研究や開発、看護研究能力	勤務学校で学習活動をしたい、仕事との平行、教育休暇制度を望んでいたことから、労働環境改善や継続教育支援体制の整備が課題
10				新任教員は教育実践能力(学生に理解と指導・教授方法・実習指導・学校行事・自治会活動・学校管理に関すること・自己啓発)の自己評価が低かった	学生の理解と指導に関することや学校管理に関すること、専門療育の研究の関して教育実践力を高める教員の指導体制を今後検討

のは、「仲間の存在」、「職場の理解」であることを明らかにしている。これらのことから、上司からの承認や支援的で支持的な先輩教員の有用性が伺える。

また、看護専門学校は大学とは違い研究費が十分ではないことから研究活動が実施できていない。また看護専門学校教員には研究実績は必要とされていない。しかし、学外での研究活動が看護実践能力を高め学習意欲を促進していることが伺えた⁷⁾。

新任教員は、教授方法や学生指導などの教育実践において困難を抱えていた¹²⁾。また、理論的思考や看護過程の展開に関する知識不足により、支援を求めている様子が伺えた。特に専任教員講習会を受講するまでの教員は、授業設計や教育課程への理解が不十分で、自信が持てないまま学生対応していると思われる。片岡ら⁸⁾は、看護専門学校教員は、「日常の業務の忙しさで学習の時間が生み出せない」という現状の中でも、「教育実践能力の向上を目的とする指導・教授方法・授業評価」に対する学習を望んでいることを報告している。つまり、業務量が多く時間的ゆとりがない中においても、看護専門学校内でも研究活動を行える機会や組織的な継続教育を行う環境を確保することが、教育実践能力や看護実践能力を向上させると考える。

2. 継続教育の課題

先に述べたように、継続教育の必要性は8文献で言及されていた。臨床においてもクリニカルラダーが導入され、教育手法として発展してきた。看護専門学校教員の継続教育においても、経験年数に応じた教育システムを開発し実施することが、看護専門学校教員の成長を促進し、看護教育の発展につながると考える。

Ⅵ. 結論

看護専門学校教員の生涯学習行動の内容を明らかにし、継続教育の課題を見出すことを目的に、8文献の検討を行った。その結果、以下のことが明らかとなった。

1. 看護専門学校教員は、外部研修や大学院進学など、自己教育を中心とした生涯学習活動を行っていた。
2. 看護専門学校教員を取り巻く人々との関係作りや仕事の満足感、職場での役割変化が生涯学習行動に好影響を与えていた。
3. 看護専門学校教員は、業務量の多さによる時間不

足や人員不足など労働環境に対する困難を抱えていた。

4. 新任教員は学生個々に対応した教授方法や学生指導など教育実践力向上や、コミュニケーション能力、看護実践能力の維持、研究能力向上へのニーズがあった。

5. 組織的・体系的な経験年数別の継続教育システムの構築が必要である。

Ⅶ. 引用文献

- 1) 原田美和子 (2015)：看護教員の質向上に関する研究，北九州市立大学大学院紀要，(28)，85-105.
- 2) 厚生労働省 (2010)：専任教員養成講習会及び教務主任養成講習会ガイドライン，(www.ajha.or.jp/topics/admininfo/pdf/2015/150109_2.pdf，アクセス日 2015年11月1日)。
- 3) 文部科学省 (1981)：生涯教育について (答申) (www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_chukyo_index/toushin/1309550.htm アクセス日 2015年11月1日)
- 4) 野本百合子 (2012)：看護学校に勤務する教員の学習ニーズと教育ニーズの特徴—中・四国地区の看護学校教員に焦点を当てて—，9 (1)，17-22.
- 5) 豊田省子 (2004)：看護職者の生涯教育—支援策を考える—，自治医大看護短大紀要，医学教育，35，77.
- 6) 豊田省子 (2004)：看護職者の生涯教育—学習ニーズを考える—，自治医大看護短大紀要，医学教育，35，76.
- 7) 豊田省子 (2002)：看護教員の自己教育力に関連する要因—生涯学習の実態から—，自治医大看護短大紀要，9，21-31.
- 8) 片岡和江，久保真知子，江良弘子，他. (2013)：北海道内看護教員の継続教育における現状と課題 (1) 調査結果から目標設定の検討へ，看護教育，54 (5)，386-392.
- 9) 久保真知子，片岡和江，江良弘子，他. (2013)：北海道内看護教員の継続教育における現状と課題 (2) 能力達成目標の設定と経年別研修内容の検討，看護教育，JUN，54 (6)，448-494.
- 10) 玉井妙子，谷明子，加川登喜子，他. (2002)：看護教員の教育実践能力に関する認識の実態，看護展望，27 (1)，106-110.

- 11) 草柳かほる (2014) : 看護専門学校に働く看護教員のキャリアに影響する要因—外的・内的キャリアと就業継続意思との関連性, 東京女子医科大学看護学会誌, 9 (1), 39-47.
- 12) 大場志乃 (2006) : 新人看護教員の自己教育力の検討 —実習指導における自己評価と振り返りを分析して—, 神奈川県立保健福祉大学実践教育センター看護教育研究集録, 31, 166-171.
- 13) 村瀬智子, 村瀬雅俊 (2000) : 熟練看護師のライフヒストリーにおける学習意欲を保持する過程—自己・非自己循環理論の視点から—, Journal of Quality Education, 5, 53-69.